

# 陽気だより

養徳社

検索

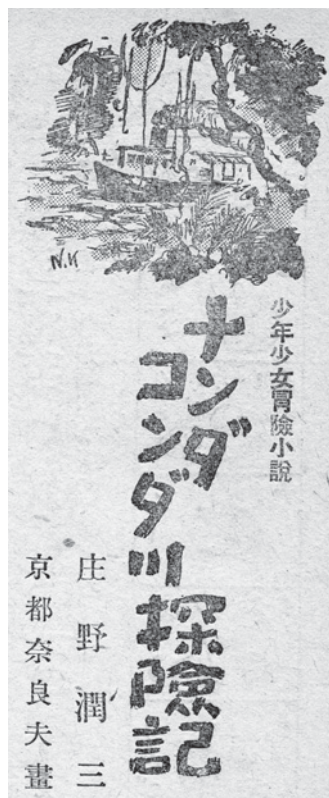
ホームページからご覧いただけます

No. 49

2011.4.15

第6号(24年10月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年で62年を迎えます。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。



これは、アメリカのぼくたちのお友だちの、愉快的冒険物語である。

(一)

今年の夏休みは妹のメッグと親友のディックと三人で大冒険をして、とても、すばらしかった。

ディックは教室にいる時は、実におとなしい。どこにいるのかわからないくらいだ。ところが、一たん学校の外へ出ると、まるで別の人間みたいになる。こんなに勇敢のある、男らしい、しかも頭のいい少年はいない。メッグも、なかなか元気がないわ、としょっちゅうこぼしている。大きくなったら女の探検家になって、アフリカ

やボルネオのおく地へ出かけるのだといっている。

この三人が、ぼくたちの町のすぐ近くを流れているナンダコンダ川をボートにのって冒険旅行をした。

(二)

ぼくたちの住んでいる町から二里ばかり北の方へ行くと、ナンダコンダ川が流れている。しかし、それは本当の名前ではない。地図には、ちゃんと名がのっている。その名前をいうと、みんな、なんだ、あの川かというにきままっているから、ぼくたちがいつもよんでいるように、ナンダコンダ川とよんでおこう。

ボートの中には、パンやかんづめやじゃがいもや玉ねぎが、いっぱい積みこまれてあ

った。

ボートといっても、中に小さな船室があつて、三人はゆつくりねられるくらいの広さがある。ディックが船長で、ぼくはこよう海長、メッグがコック長である。ぼくは機械をいじるのがすきだから、船を動かすことはぼくの大きいものだ。

いよいよ出発の時間が来たとき、ディックは高らかに、「出発！」とさげんだ。ぼくは空にひびけとばかり汽てきを鳴らし、厳し<sup>げん</sup>しゆくな顔をして前方をならんだ。

ボートは静かに岸をはなれた。見送りの人は、ぼくたちが買物をした食料品店のテッドおぢさんひとりきりだった。テッドおぢさんは、オールド・ランク・サイン(蜚の光)を大声でうたい始めた。ディックも、ぼくも妹も、声をそろえてうたった。

(三)

太陽は空にかがやき、川の水はキラキラまばゆいくらいだ。ボートは上流へ向けてすすんでゆく。

「ナンダコンダ川の上流には」とディックがぼくのところへ来て話した。

「恐ろしいインディアン村がある。そいつらは、我々が上流に近づくことを好まない。今までに何十人という探検者が彼等にさらわれて行方不明となった」

ディックは、そこで川の兩岸をすばやくならんだ。このあたりから、木がだんだん多くなってくる。その間からひくい岩山が見える。

「きょうの夕方から、僕たちは十分に警戒しなければいけない」

ぼくは、だまっつうなづいた。そして、運てん室の壁につるしたピストルをみて、にっこりわらった。

その晩のことだ。

ボートを岸につけて、ぼくたちは上陸した。メッグは夕食の用意を始めた。その間にディックとぼくは、あたりの地形をしらべるため林の中へ入って行った。(次号完結)

庄野潤三(しょうの・じゅんぞう)

作家 1921~2009

現大阪市生まれ。教員をへて朝日放送入社。1954年、『ブルーサイド小景』で芥川賞受賞。『第三の新人』(安岡章太郎・吉行淳之介・遠藤周作ら)

の一人。

# 信仰例話 (道友社刊『真実の道』より)

## 信じ切る

飯降伊蔵氏は樺本村高品の人で、大工の棟梁であった。妻のさとさんが流産した後が非常に悪く、色々手をつくしたが、はかばかしくなくて困り抜いた末に、河内の富田村に産の妙手があると聞いたのをたよりに、遠路ではあるがその人を迎えようと仕度していると、椿尾村(※樺本の東北三キロ程度、現奈良市内)の喜三郎という知人がやって来た。この話を聞いた喜三郎氏は、「今、その横田村(※樺本の東二キロ程度)で、庄屋敷村に、お産にあらたかな神様があらわれたと聞いて来た。そんな遠方まで行くなら、物のためしや、庄屋敷へ行ってみたら」とすすめた。

伊蔵氏は、早速、その日のうちにお屋敷にかけつけた。夕方であった。

話のあらましを聞かれたこ、かん様は、神様にお願いになった上、

「神様は救けてやろうと仰せになります。けれどそこはあんたの心次第で、ほんとうにお助け頂けた



めには、心から神様におもたれし、神様の仰せを守り切らなければいけません。その決心が出来ますか。天理王命という神様は、何分、はじめての神様ですから、誰も皆、そ

う簡単に信じ切れないのですけれど……」  
 と言われ、御札をお書きになつて、散薬と一緒に下されし。それと共に「おびやゆるされ、流産でも腹おびをして

いるだろうが、それも取りのぞきなさいなど、細かい注意もして下さった。

伊蔵氏は、宙をとんで家に帰ると、さとさんに、教えられた通り、散薬を与えられたところ、少し気分がよく

なりました。それにより、夜を待たかなくて、再びお屋敷に参拝された。こかん様にその由を申されると、「神様が救けてやろうと仰し

してもたれておいでなさい。案じ心を一切出さないように」と重ねての御注意であった。

散薬を頂くと大急ぎで帰宅された氏は、一生けん命、神様を念じつつ、また一服飲ませたところ、その日の夕方には目立って楽になり、三日目には、ふとんによりかかつて自分の手で食事されるようになった。

夫妻のひたむきな、純な信仰によってやがて、さとさんはすっかり元通り元気なからだととなった。

本席飯降伊蔵氏の信仰はここに出發している。

教祖様御小伝  
二八・三一八

## 養徳社 よもやま話

○……このたびの大震災により、被災されました方々に心より見舞い申し上げます。

弊社にも震災の影響が出て来ましたが、「陽気」に使用する紙は、宮城県石巻市の工場で製造していたのです。五月号の紙を作る直前に津波が来たとのこと。工場も浸水に遭い、マシンが動かすという状態です。

しかし、紙問屋の奔走のおかげで、五月号は二種類の用紙で何とか発行できるようにになりました。今後用紙が変わります。ご了承ください。

○……震災後の教内の救援・支援活動の災害救援隊を中心とした記事を、「陽気」五月号に掲載しました。その情報収集に活躍したのは、インターネットの交流サイト・フェイスブックでした。先に、中東に激変を巻き起こした要因の一端といわれるフェイスブックの活動情報が、今回の記事につながりました。今後も教内の「たすけあい」の姿を載せていきます。ごらんください。

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用ください。お願いします。お願ひ申し上げます。

養徳社

## 第1回公募

# 養徳社エッセイ賞

作品集 募集

選者 出久根達郎(作家)  
枚数 400字詰め原稿用紙8〜10枚  
締切 平成23年8月31日

入賞 一等正賞楯 副賞10万円(一名)  
佳作正賞楯 副賞3万円(二名)  
※詳細は『陽気』5月号39頁をご覧ください。

## 好評につき第2弾!

# お道の人の とっておきの話2

朝席・夕席に最適です

定価=1,155円(税込) 送料200円